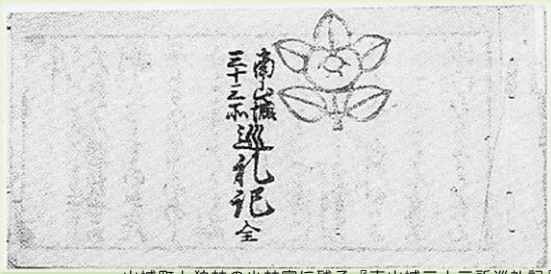


第15回 ふるさと発見の旅 **一春一** 春爛漫の里山 巡礼記の道、古墳、いちご園 菱田～僧坊～谷集落を巡る旅

開催日：4月19日（土）・22日（火）

集合：午前9：30 近鉄狛田駅改札口前
解散：午後3：30頃 JR祝園駅前



山城町上狛林の小林家に残る『南山城三十三所巡礼記』

《コース 約6km》

近鉄狛田駅前（スタート）

- 第17番 菱田 長福寺跡／西方寺
- 川西側線跡 →山田池・下狛新池
- 第16番 下狛僧坊・若王寺
- 第15番 僧坊鞍岡山 神宮寺跡／鞍岡神社
- 鞍岡山古墳群 →下馬遺跡 →瓜生田の碑
- いちご園 →JR祝園駅前（解散）



主催：公益社団法人 精華町シルバー人材センター **ふるさと案内人の会**

後援：精華町 ・ 精華町教育委員会



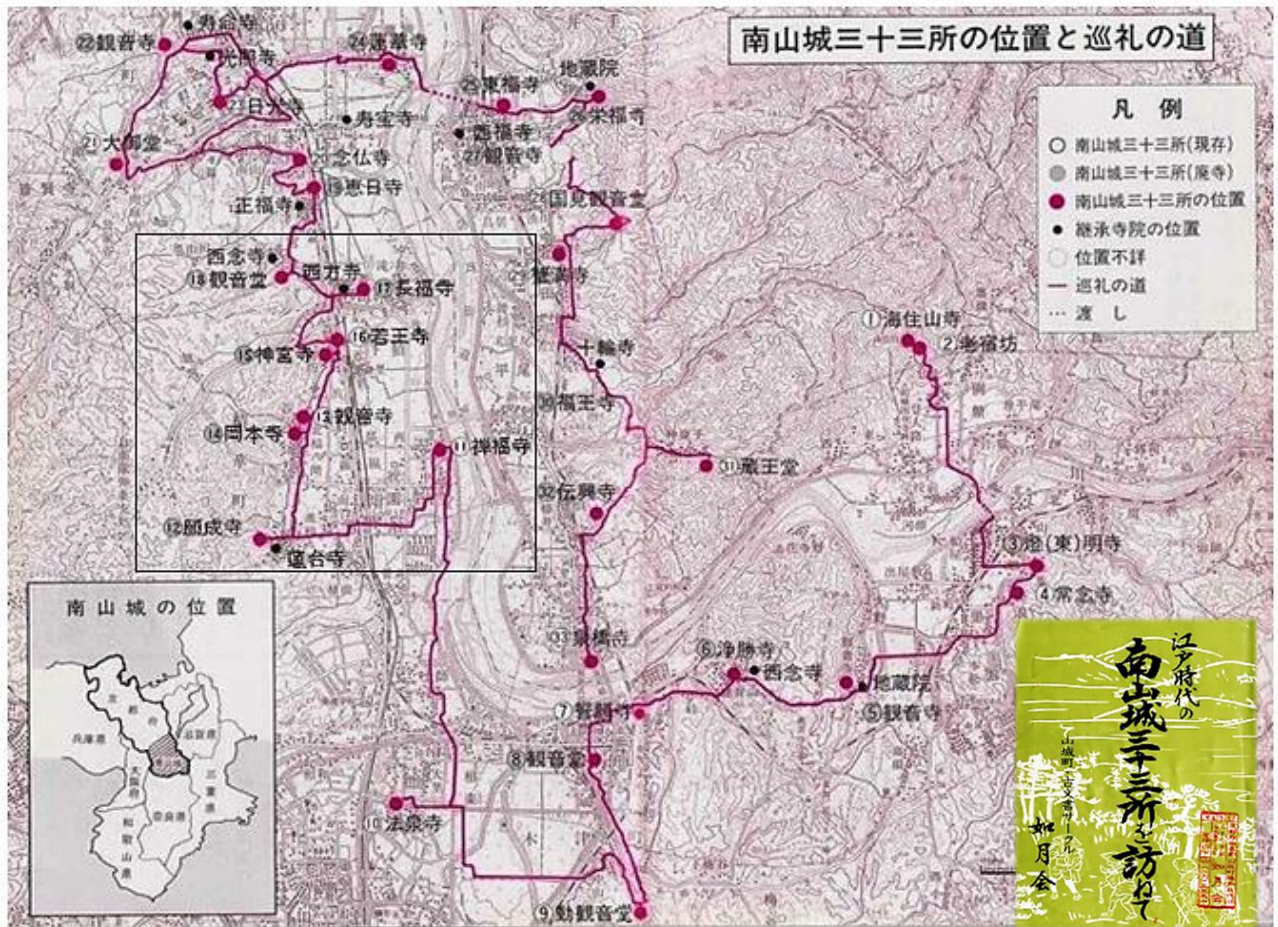
南山城三十三所は、貞享のころ（一六八四～八八）相楽郡綺田村（山城町内）の東光寺に住む「じよはん」（如範）という僧が、篤く観音を信仰し、西国巡礼にならって南山城内に三十三の霊場を選び、御詠歌を作って人々に勧めたというものである。

南山城三十三所の札所は、加茂町五、木津町五、精華町七、田辺町七、井手町三、山城町六で、計十里二十六丁（約四二軒）の行程でした。これは当時でも数日で一巡できる距離で、綴喜・相楽二郡の代表的な観音霊場が選ばれていた。

山城町上粕林の小林家に残る『南山城三十三所巡礼記』（巡礼記）は、小型の懐中本で、それによると、貞享のころに成立し、賑わっていた南山城三十三所も次第に廃れてしまったので、天保六年（一八三五）九月、井手郷玉水の橋講が復興しようとして、原本のまま『巡礼記』を再刊したという。

明治維新期の神仏分離政策と、それに続く廃仏毀釈、寺院の統廃合により、『巡礼記』の三十三所のうち、約半数の十七カ寺が廃寺となったが、そのうち半数が宮寺であった。こうして南山城三十三所は消えていった。

如月会 『江戸時代の南山城三十三所を訪ねて』より



南山城三十三所観音霊場一覧（精華町内）

霊場名	『巡礼記』の本尊	所在地 (廃寺跡は推定地を含む)	合併および 継承寺院	備考
①祝園 禪福寺	十一面観音	精華町祝園国友 36		
②南庄 願成寺	十一面観音	精華町南稲八妻政ヶ谷 45	蓮台寺	寺跡は現在民有地
③北稲八間 観音寺	十一面観音	精華町北稲八間焼山 35		寺跡は北稲区集会所
④北稲八間 岡本寺	聖観音	精華町北稲八間焼山 35		当寺へ観音寺が移転
⑤僧坊 神宮寺	十一面観音	精華町下粕長芝 24		鞍岡神社境内石段上の北
⑥僧坊 若王子	千手観音	精華町下粕林前 9		
⑦菱田 長福寺	十一面観音	精華町菱田十の坪 21-1	西方寺	寺跡は菱田区集会所

第十七番 菱田 長福寺

【廃寺】

十一面観音 安置

西方寺

ひしだ (長福寺)

十七番 ちやうふくじ

本尊十一面御長二尺八寸

みちとひし (田) (面)
たのもを

すぎて いるてらに

(説法)
とくのりのみを

(尊)
みるぞたうとき



西方寺・観音堂

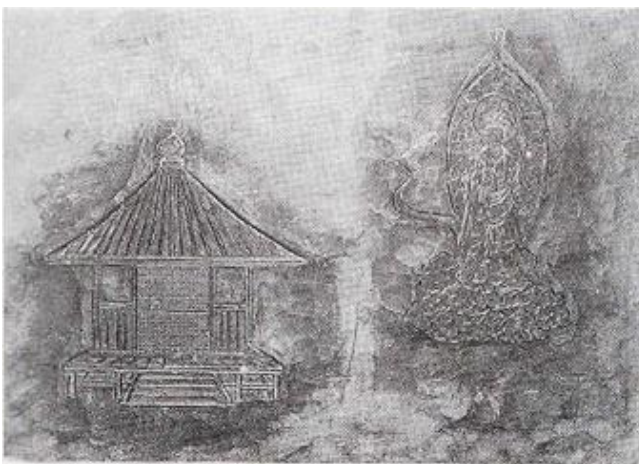


長福寺跡

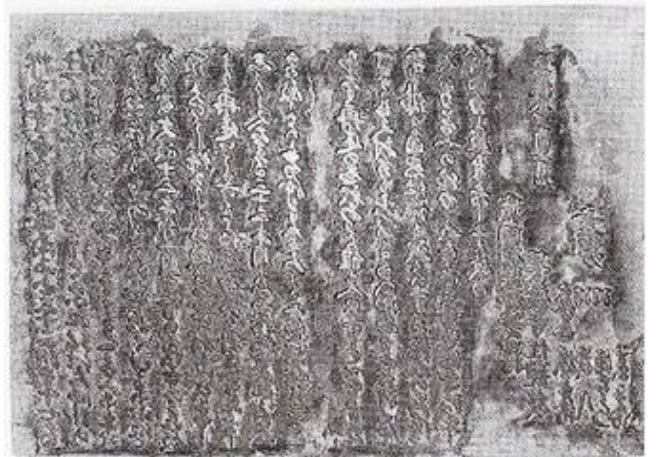


十一面観音御長二尺八寸
本尊十一面御長二尺八寸
はしだちやうふくじ
みちとひし 田 面
たのもを
すぎて いるてらに
とくのりのみを
みるぞたうとき

廃寺となった年月日は未詳。
長福寺の本尊や什物は近くの西方寺に引き継がれた。
天保八年（一八三七）の版木が残っていて、「文政十三年（一八三〇）出火、本堂客殿共に焼失、本堂再建が自力では困難ゆえ、助力を希う」とあり、もう片面には観音堂と観音像が刻まれている。
本尊の十一面観音立像（室町時代の作）は、安産の仏として信仰され、西方寺の門を入り右手にある観音堂に安置されている。
寺跡には菱田区集会所が建っている。



長福寺の十一面観音の姿と観音堂の版木



長福寺観音堂再興勧進状版木

精華町 西方寺蔵

下狛「新池」・菱田の「山田池」

新池を「どろくぼ」と呼び、下狛区（僧坊・里・舟）の田畑 40ha に大切な用水を供給しています。このため池を保持管理しているのは、農家 220 名で構成されている水利組合の人たちです。先人の知恵と努力で、効率よく煤谷川の水を取り入れています。それまでは、水の奪い合いで地区間では代官所に訴えたりして何度も争いが絶えなかったと言われています。

この辺りは、隣接している菱田区の山田池と並び、絶景に恵まれ、冬には数種の水鳥が群がりカメラマンも多く集まる場所でもあります。

山手幹線の京田辺市への工事が始まっています。完成時は工事用の堤は無くなり、コンクリートの橋脚が池の上に建つ姿になるそうです。

当初の完成予定は、平成 28 年（2016）3 月ですが少し遅れるそうです。



智証大師座像



千手観音菩薩像

しるべある ときに
 まかせて しもつごま
 わかきもおひも
 十二へひとこゑ

十六番 にやくわうじ
 本そん千手御たけ二尺五寸
 これよりひしだへ六丁
 (若王子)

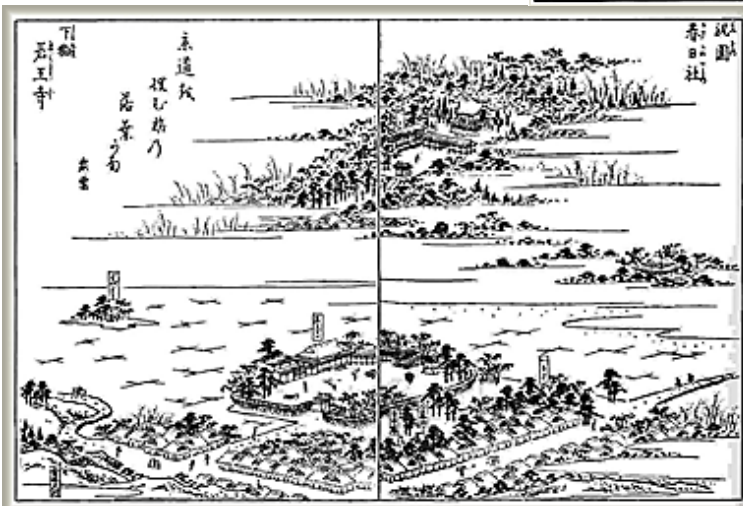
浄土宗西山禅林寺派
 鞍岡山 若王寺

第十六番 下狛僧坊 若王寺

あるとときに
 まかせてしもつごま
 わかきもおひも
 十二へひとこゑ

十六番にやくわうじ
 本そん千手御たけ二尺五寸
 これよりひしだへ六丁

①僧坊 若王寺（「拾遺都名所図会」）



寺伝によると行基の創建とあり、また貞観三年（八六一）三井寺の智証大師円珍が、この地に開いた円満院との縁をひく寺とも伝えられ、源平争乱で焼失した。
 その後、桃山時代に僧経空慈典が京都の禅林寺永観堂から梵鐘を譲り受け当寺を復興したそうです。
 大師堂の智証大師坐像は、平安後期の作で重要文化財です。同じ大師堂に、千手観音菩薩像が安置されており、お堂の前には百六十年前に奉納された詠歌額がかけられています。

第十五番 僧坊釋阿山 神宮寺

【廃寺】

十一面観音 安置

若王寺

そうぼうくらかおかやま（神宮寺）
十五番 じんぐうじ

本尊十一面御たけ八寸

これよりにやくわうじへ二丁

一すじに ふたよの

ことも いのりおく

（鞍岡山）
くらかやまに

のぼりけるかな



神宮寺跡



若王寺に残る「神宮寺」銘の石塔土台



十一面観音坐像

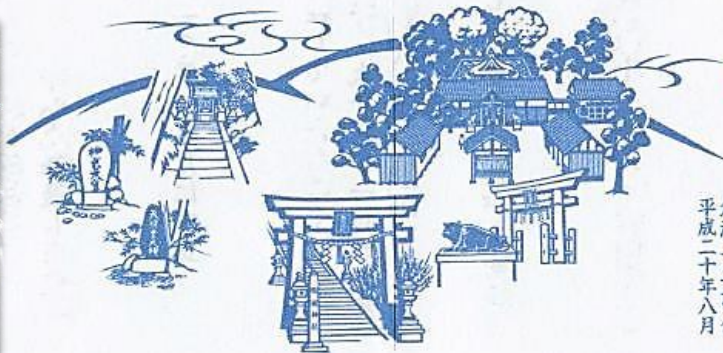
本尊十一面御たけ八寸
これよりにやくわうじへ二丁
一すじにふたよの
こともいのりおく
くらかやまに
のぼりけるかな

鞍岡神社の境内にあった宮寺
鞍岡神社は、寛弘五年（一〇〇八）
京都北野社より勧請し創立され
たといわれ、明治十六年（一八
八三）に鞍岡山天満宮から鞍岡
神社と改称した。
昔は石段の中段から右へ脇道
があり、神宮寺へ通じていたら
しいが、今は登りつめた北側の
平坦地の林が寺跡だと、神主さ
んに案内される。
神社麓の若王寺大師堂前に
は、文龜元年（一五〇二）の石塔土
台があり、堂内には、神宮寺の
本尊かと思われる十一面観音坐
像が安置されている。

鞍岡神社



創祠千年記念
平成二十年八月



鎮座地 精華町大字下粕

小字長芝二十四番地

創立 寛弘五年（一〇〇八）

御祭神 菅原道真公

境内社

地主神社、白大夫神社、老松
神社、西宮神社、狭夜姫神社

道祖神社、風神社、大國主神
社、稻荷神社、山神社、祈雨

神社

由緒

社伝によれば寛弘五年（一〇〇八）
八月二十五日京都北野神社から勧
請したと伝えられている。

元和三年（一六一七）八月の古文書
によると「下粕村天神社」と記され
ており、その後近世後期に作成され
た下粕村明細帳によると「鞍岡山天
満宮」と称されていた。明治十六年
四月に鞍岡神社と改称された。当神
社は村の宗教的拠り所として宮座
が営まれていたが、現在では大夫制
度として残されている。

本殿 造営年月 安永二年八月八日

一七七三

様式 木造檜皮葺の春日造

の社殿

鳥居 境内中央にある大鳥居は宝永七

年（一七一〇）九月に建立され

た石造の両部鳥居である。

能舞台 本殿造営当時から東西の両仮

屋と共に存在していたもの

で、能は奈良から金春大夫が

来て演じ座子（氏子）が一對

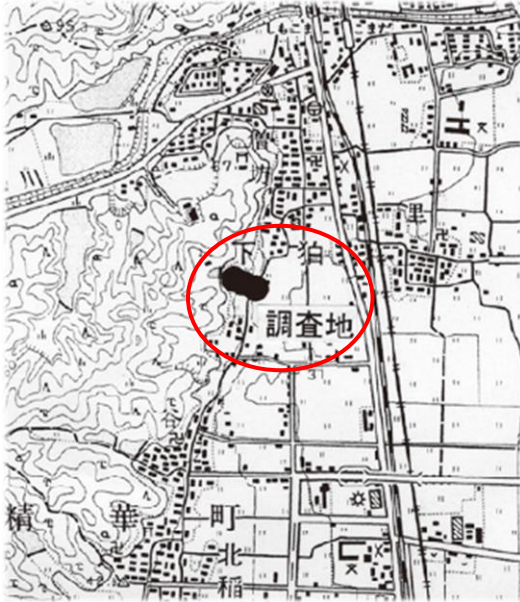
の仮屋で観覧していた。

＜下馬遺跡＞

下馬遺跡は、甘南備丘陵の南東側斜面に位置する。遺跡からは南山城を広く見渡すことができる。発掘調査は、府道八幡木津線（山手幹線）の建設に先立ち実施された。

発掘調査では、下馬遺跡が平安時代後半から室町時代を中心とする時期の集落遺跡であることがわかった。14～15世紀頃の瓦や香炉などが出土しており、周辺に瓦葺きの建物が存在したとみられる。また、総柱式の掘立柱建物跡や柵列などを検出した所を中心に平安時代後期の生活空間が広がっていることがわかった。また、河川跡からは縄文時代晩期の土器が出土したが、下馬遺跡の南西には、縄文時代の石器が出土した大福寺遺跡が所在し、何らかの関係が予想される。

（京埋セ現地説明会資料 09-07 より引用）



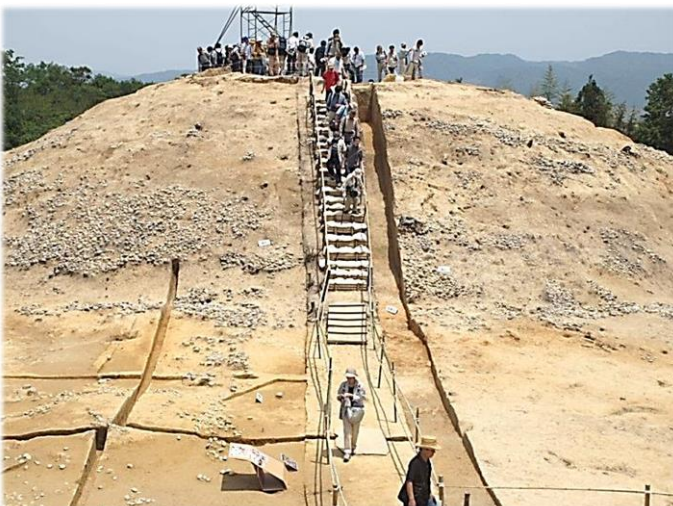
＜鞍岡山古墳群＞

生駒山地からのびる丘陵の尾根上に位置している。同じ丘陵には、鞍岡山3号墳、1号墳、2号墳、4号墳と四基の古墳が所在しており、これらを総称して鞍岡山古墳群と呼ばれている。

＜鞍岡山3号墳＞

精華町大字下狛小字大福寺・長芝

京阪電気鉄道株式会社計画の宅地開発事業の事前調査として、平成15年度から、古墳の発掘調査が行われ、平成22年度をもって、古墳のすべての調査が完了した。



鞍岡山3号墳

〈鞍岡山3号墳〉

その調査から、古墳時代前期後半から中期前半（4世紀後半・5世紀前半）にかけて、現在の精華町域の北部を治めていた地域首長層の墳墓群と考えられている。

なかでも鞍岡山3号墳は、この中で最も大きく、精華町域においても、現存する最大の古墳だった。

鞍岡山3号墳の墳丘は、直径約40mの円墳で、段を設けず一段で築かれている。また、この墳丘は、丘陵尾根を大きく削って、原型を成形し、その上に盛土をして築造されたものとわかっている。

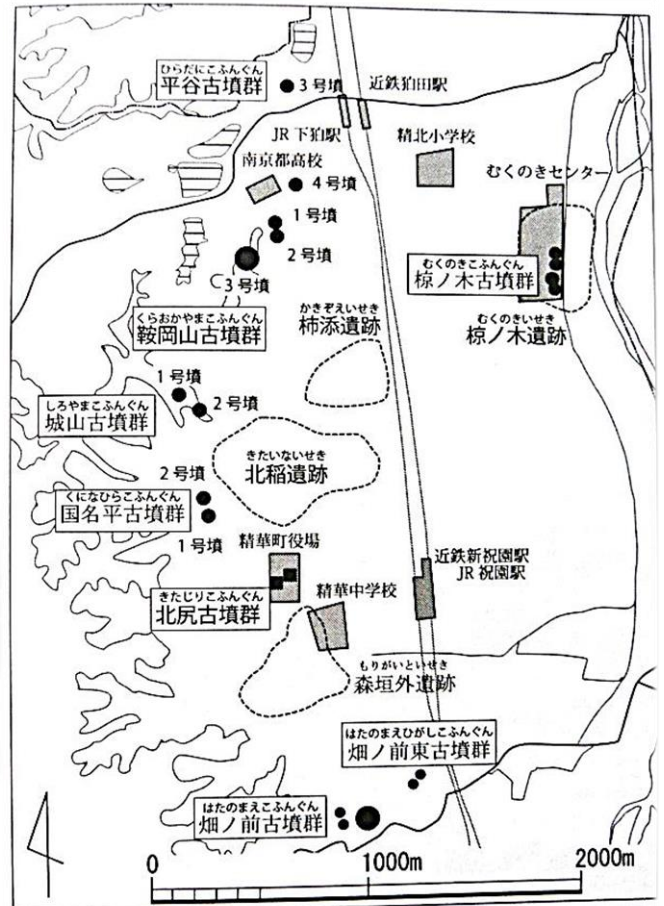
墳丘の南と北に広がる平坦面は、古墳に伴う施設の一部として、墳丘造成時に成形され、整地されたものであることもわかった。鞍岡山3号墳は、墳丘、埋葬施設、墳丘外施設など、充実した内容をもった古墳で築造時期は4世紀末・5世紀初頭と考えられている。

鞍岡山3号墳周辺の同時期の古墳をみると、鞍岡山3号墳の北方に平谷2号墳、精華町役場付近に北尻古墳群がある。このような分布状況から、鞍岡山3号墳は、現在の下粕地区程度を治めていた地域首長の墳墓と考えられている。

地域首長でありながら、このような充実した古墳を築造できた背景としては、精華町域が、大和、山城、河内の結節点であることが考えられる。

鞍岡山3号墳の被葬者は、交通の要所を押さえることで、大和にあったとされるヤマト王権と密接な関係にあり、地域首長としては比較的大きな権力を保持していたのかもしれないと考えられている。

精華町文化財愛護会だより 第28号（平成23年3月）より

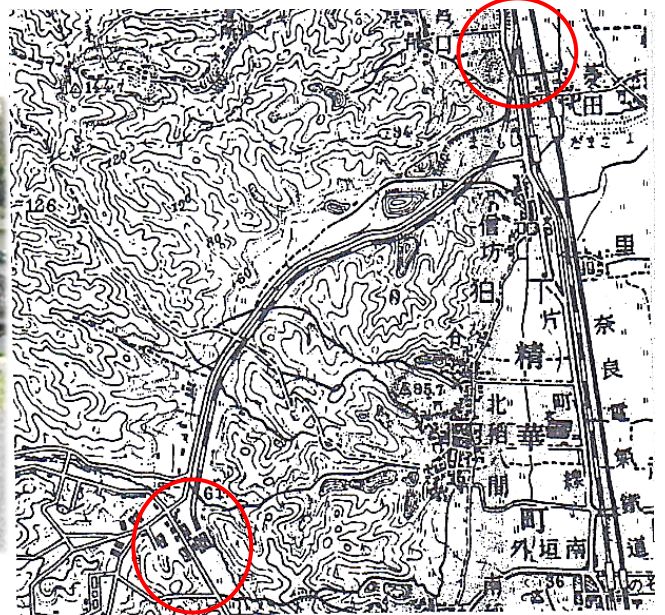


第5図 精華町主要古墳分布図

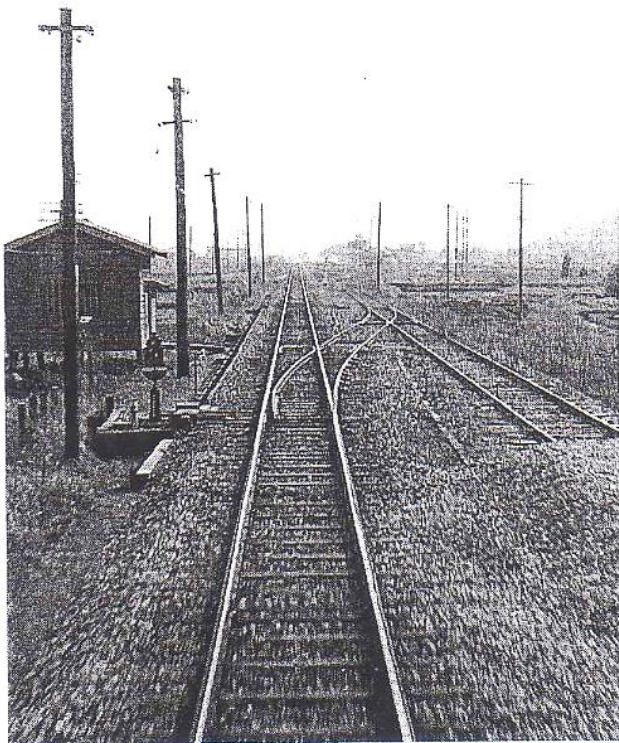
＜旧陸軍軍用鉄道・川西側線/片町線との分岐点＞ かわにしそくせん ◆弾薬庫への引込み線◆



鉄橋は廃線後もそのまま残されていたが、治水対策の観点から、平成19年(2007)には撤去された。



1/5万地形図「奈良」(昭和38年発行)×1.0



▲片町線の車窓から写した分岐点、右へカーブして山あいの弾薬庫へと通じる。昭和35年2月



2014/03/31 撮影

昭和18年(1943)の晩秋、在学していた旧制商業学校3年生に、〇月〇日から3日間、〇〇部隊に出動、作業に従事するといった通告を受けた。集合は早朝の京都駅前、未だ陽の昇り切らない薄暗い時刻であった。集結した約150人は当時の奈良電、現在の近鉄京都線の急行に乗車、臨時停車した「狛田」で下車、隊列を整えて生駒山脈北部に連なる丘陵へ通じる道路を行進した。

少し行くと踏切があり、その先道路と線路が並行する。一面に立ち込める朝露の背後から蒸気機関車の排気音が追って来た。やがてC11形タンク機関車に牽かれた貨物列車が隊列の横を通り過ぎて行った。約2kmほど進むと営門があり「祝園部隊」の標札が掲げられていた。

当時学生間で秘密事項として流布していた「帝国海軍に戦艦大和あり、陸軍の弾薬庫祝園部隊が府下南部にあり」と称されていた砲弾工場、貯蔵庫である。

ここは、昭和14年京阪沿線の枚方にあった禁野(カノ)弾薬庫が大爆発を起こし、施設が壊滅、周辺地域は被害を受け、京阪も数日間不通となる大事故があった。軍部は急遽代替施設をこの地に設け、片町線田辺-祝園間の途中で分岐する引込線を敷設していた。弾筒に火薬を充填する作業場、山間の窪地に点在する貯蔵庫、それらを結ぶ道路とトロッコの線路からなっている。

初めのうちはいつ爆発するか判らないと、ヒヤヒヤしながらの作業であったが、2日目からは度胸もつき、充填や運搬の作業をおえた。

帰途も営門を出て駅へ向かって行進していると、背後から汽笛を鳴らし、貨物列車が下り勾配を滑るように隊列を追い抜いて片町線との分岐点へ向かって行った。約60年前の出来事だが、未だに私の頭脳の一隅にその光景が刻み込まれている…。

戦後カメラを入手して、この引込線の分岐点を記録に残しておきたいと思って写したのがこの1枚の写真。昭和35年の撮影で、片町線ディーゼルカーの車窓から写している。右側に分岐するのが弾薬庫への引込線。

(随筆：田辺・川西側線、片町線より)

<瓜生田の遺跡の碑>

平安時代のころに謡われた「催馬楽(さいばら)」（古代歌謡のひとつ）のなかに、「山城の 狛のわたりの 瓜つくり……（山城国の狛というところの瓜作り人……）」と、いう歌があり、かつて、精華町下狛や山城町上狛などの「狛」の地で、瓜が作られていたことが分かっています。しかし、その正確な位置や栽培されていた時代など、詳細はまだ明らかになっていません。

ところが、地元では、古くから、この瓜が栽培されていた場所、すなわち「瓜生田(うりゅうでん)」は、谷集落の東方にあったと伝えられていたようで、そうした伝承を後世に残すために、1906(明治39)年、地元有志の手により「瓜生田の遺跡」の碑が建立されました。碑は現在、谷区集会所の敷地内にありますが、当初は、現在位置の東方約20mの水田のあぜの上に建てられていました。

(せいか検定 100問より、生涯学習課監修)



<いちご>

精華町の特産品の代表である「いちご」は、30年以上に渡って精華町の顔となっている。京都府内最大の栽培面積を誇り、いちご狩りは毎年3万人以上を集める観光の中心としても活躍している。

いちご狩りは1月中旬から5月までで、品種は「さがほのか」「とよのか」「章姫(あきひめ)」などが栽培されている。

味わえます 大地と愛情の育む逸品

美味しいものが溢れているまち



(精華町町勢要覧 2014 より写真引用)

川西観光苺園の永島真作園長(左)と華やぎ観光農園の山田春富園長



- ☆ 交通ルールの遵守
- ☆ ゴミは捨てずに持ち帰る
- ☆ 通り道の草花は絶対に摘み取らない
- ☆ トイレ等へ行ったり、途中で帰る場合は必ず引率者に連絡する

ふるさと発見の旅 ……いままで案内したところは…

- 第 1 回 『お千代半兵衛の眠る丘からけいはんな丘陵を訪ねて』
- 第 2 回 『木津川沿いを歩く』
- 第 3 回 『古の佇まいの面影を残す精華古道を歩く』
- 第 4 回 『学研都市研究施設を巡り歩く』
- 第 5 回 『山田川流域の里を歴史と文化財の謎を探りながら歩く』
- 第 6 回 『精華町最高峰「^{だけやま}嶽山」にいだかれた里 東畑を訪ねて』
- 第 7 回 『祝園八景を探る旅』
- 第 8 回 『山城の国一揆終焉の地を訪ねて』
- 第 9 回 『南山城三十三所巡り in 精華』
- 第10回 『河井寛次郎がこよなく愛した 菅井～植田の里巡り』
- 第11回 『知っているようで知らない 精華学研都市を巡る旅』
- 第12回 『山城國菱田村絵図でたどる 晩秋の藪の渡しと三つの春日神社』
- 第13回 『桜咲く大坂道を歩こう！ ～山田・乾谷・柘榴の里～』
- 第14回 『殿の松はどこじゃ！南稻八間～東畑里山～旧街道を辿る旅』

詳細資料は「精華町ホームページ」に掲載していますのでご覧ください。

・精華町ホームページ ⇒ <http://www.town.seika.kyoto.jp/>

トップ ⇒ 観光・史跡 ⇒ 精華町ふるさと案内人の会 ⇒ ふるさと案内人の会「ふるさと発見の旅」

公益社団法人 精華町シルバー人材センター
ふるさと案内人の会

〒619-0244 京都府相楽郡精華町北稻八間井手ノ元27-1
TEL 0774-98-0510 FAX 0774-98-0670
e-mail seika@sjc.ne.jp